



## ■八ヶ岳総合博物館

## 茅野市八ヶ岳総合博物館開館30周年に思う

館長 若宮崇令

1988年10月25日が茅野市八ヶ岳総合博物館の開館記念日である。郷土の自然や人々の営みを学ぶ場として、郷土を愛し、その未来を創造する人を育てる学習機関として開館した。以来展示室の公開だけでなく、年数回の企画展、市民が楽しみながら学べる体験型の各種講座等を開催し、2016年度末までの延べ入館者数は52万人に及んでいる。収蔵資料は開館時には5,032点であったが、1990年に岳麓文芸館が付加されたこともあり、現在は自然資料、人文資料、文芸資料、図書資料等、収蔵資料の合計は5万点を超えている。初めは余裕のあった収蔵庫だったが、現在はほぼ満杯状態になり、今後増え続ける収蔵品の置き場に苦慮するようになってきている。このような成果を上げることができたのは、多くの市民の協力支援と職員の努力とがあったおかげである。

30周年を迎えるにあたり、この節目を今後の展開に生かし、ますます光り輝く活動を展開する博物館にしたいと考えた。そこで今までの歩みを振り返り総括するとともに、50周年、60周年を見据えた新たな歩みを開始する良い機会ととらえ、30年の足跡を振り返る企画展の開催等の記念事業展開をすることにした。博物館の根幹は調査研究であり、資料の収集保管であり、教育普及活動であるということ言うまでもない。この根幹を見失えば博物館とは名ばかりで博物館ではなくなってしまう。また、茅野市八ヶ岳総合博物館は地域の大地、それを基盤に広がる自然、その中での人々の営みを扱う地域密着型の博物館である。それを踏まえての今まで30年間の展開があったことは誰もが認めることであり、延べ50万人以上の人々がそれに触れたという成果をあげてきている。では、30周年を次のステップアップの第1歩にするためにはどうあるべきか、私は次のように考えている。昔は珍品を保存し研究しているのが博物館だったが、次第に保存と研究に教育普及活動が加わるようになった。その後この展開に市民が参加するようになってきた。1980年代以降には調査研究、資料収集保管、教育普及と館活動に市民が有機的に関わるようになった。博物館機能は時代と

共に拡大され、そこに市民が関わる、参画するようになってきているのである。まさにそのような時代に誕生したのが茅野市八ヶ岳総合博物館であった。その中から生まれ、活動を開始したのが機織りボランティアの「ねじばな」であった。5年ほど前から博物館活動に有機的に関わってくれるということに重点を置いた「市民研究員」の養成をはじめ、現在次第に目に見える成果をあげつつある。

では、このような流れの中で次に茅野市八ヶ岳総合博物館が時代と共に輝いていくにはどうすればよいか。これからはおそらく今まで拡大されてきた機能である市民参加の意義と効果を発展させつつ、博物館の原則に立ち返り、地域社会に新たな価値をもたらす文化、情報、人材の集積所としての機能が求められる時代になるだろう。博物館活動の根幹を見据えつつ、市民の参加協力、運営にも参画する市民、それらの活動から地域社会の新たな価値創造の拠点としての博物館という姿が見えてくるのではないだろうか。このような博物館を見据えた展開を通して50周年、60周年を目指していければよいのではないかと考えている。具体的には収蔵している博物館資料に光を当て、地域価値を向上させること、また、地域資料・地域文化に関する調査研究と資料・情報を収集し、デジタル化して広く発信していくこと。さらに、地域の課題に幅広い分野で取り組む担い手である市民研究員等人材の育成、活発なアウトリーチ活動を展開し地域密着性を向上させることである。このような展開を活発に行う中から地域の新たな文化が育まれていくことを期待し、その拠点としての博物館が未来の博物館ではないか。これには博物館が単独で頑張るのではなく、大学、企業、市民団体等への連携を働き掛け、そのハブ的存在となり、産学公民一体となったランニングのできる博物館になっていかなければならない。そんな市民、地域と共に歩む地域密着型の博物館が今後のあるべき姿であろう。光輝く10年先、20年先の地域博物館としての茅野市八ヶ岳総合博物館を夢見て、そのキックオフになればよいと願いながら記念事業を開催させてもらうことにした。

## 第0回八ヶ岳JOMONライフフェスティバル

### ○第0回八ヶ岳JOMONライフフェスティバルの開催

トリエンナーレ方式の総合芸術祭「八ヶ岳 JOMON ライフフェスティバル」(以下、ライフフェス)が9月9日(土)～10月22日(日)に開催され、市内各所でさまざまなイ



ベントが催されました。尖石縄文考古館と史跡公園は、オープニングイベントやこのフェスティバルの核となるイベントのひとつである「茅野市 5000 年尖石縄文まつり」が開催され、メインのイベント会場となりました。

### ○ライフフェス期間中に考古館で開催したイベント

この期間中には、イベントとして、9月9日に「縄文を楽しむ② 縄文のビーナスと仮面の女神の土鈴と土笛を作ろう」、また「ナイトミュージアム 大人向け」、16日に「縄文ゼミナール第3回 黒曜石鉾山から考える縄文人の生活」、17日に「縄文を楽しむ③ 小さい縄文のビーナスを作ろう」、23日と24日の2日間で「縄文教室④ 竹ざるを作ってみよう編んでみよう」、10月には7日に「第18回宮坂英弐記念尖石縄文文化賞授賞式」と「縄文文化大学講座」、「尖石縄文の里 夜の火祭り」、8日に上記した「茅野市 5000 年 尖石縄文まつり」、9日に「土偶の日記念対談 “土偶のリアル” を語る」、14日に「縄文ゼミナール第4回 諏訪湖底曾根遺跡 見えないものが魅せるもの」、15日に「縄文かるた大会」、21日と22日の2日間で「縄文教室⑤ 縄文時代の編み方を学ぶ」(21日は講演会「縄文の布—編布について」、22日は作品作りワークショップ)を開催しました。

9月と10月にイベントを開催するのは、考古館ではお馴染みではありますが、ほぼ毎週何かイベントをしている、というのはこれまでにない試みでした。縄文教室はこれまで以上に多くの申し込みがあり、大変盛況でした。

### ○ライフフェス期間中の特別展等

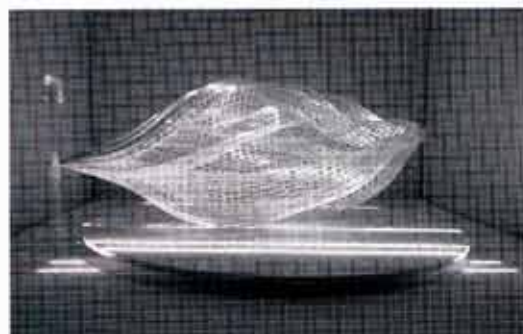
展示では、特別展「CHINO/ 茅野 × 縄文 / JOMON」(7月14日～10月22日)、ロビー展「縄文学習展示発表」(8月25日～9月12日)を実施しました。

特別展は、「八ヶ岳 JOMON ライフフェスティバル」の主旨も踏まえて、インフラ整備等で発掘調査がおこなわれ、すでに消滅してしまった遺跡を紹介しました。国指定の特別史跡尖石遺跡や、国宝「土偶」(縄文のビーナス、仮面の女神)が出土した棚畑、中ッ原遺跡が話題になることは多い一方、市内のどこにどんな遺跡があったのか、知ってもらう目的でこのテーマにしましたが、まだまだ紹介しきれないというのが正直なところです。

ロビー展示は、市内の小中学校が取り組む「縄文科」の成果展示で、「縄文科」がスタートしてから各校の取り組みを一堂に当館で展示するのははじめてのことです。会期は当館のハイシーズンでもあり、多くの来館者にご覧いただくことができました。

### ○アーティスト後藤さんの作品展示

ライフフェスの期間中、海外でも注目を集めている若手アーティストである後藤映則さんの作品も2点展示しました。作品は、国宝「土偶」(縄文のビーナス、仮面の女神)をモチーフとしたもので、土偶にこめた縄文人の思いを意識した作品となっています。1点はロビーに展示、もう1点は国宝「土偶」2体と同じ展示室Bに展示しました。こうした現代芸術の作品が国宝「土偶」と並んで展示されるのは、当館でははじめてのことになります。これらも多くの来館者の注目を集めました。



後藤さんの作品  
光線を当てると、断面に仮面の女神のシルエットが現れる

ライフフェスの期間中は、例年の同時期に比べて大変多くの方に来館していただき、さまざまなイベントとこれまでにない展示品で、より一層考古館に親んでもらえたのではないかと思います。

## 縄文アートプロジェクト2017

2017年9月9日から10月22日まで、茅野市が開催した「八ヶ岳 JOMON ライフフェスティバル」の関連事業として、茅野市民館／茅野市美術館は「縄文アートプロジェクト2017」を開催しました。イベントの内容は下記の通りです。

【アートインスタレーション】

●藤森照信 新作茶室 竪穴式茶室「低過庵」 ●まちの展 vol.4 (連携事業) ●ギャラリー・ビオラハウス ●こどもたちとみんなの JOMON アートワーク ●ギャラリー・バードハウス ●JOMON フードスケープ「縄文のうつわ展」 ●JOMON フードスケープ「現代的縄文食風景」

【パフォーマンスアーツ】

●平原綾香ライブ with 平原まこと

【関連企画】

●道しるべの土器ランプ ●JOMON ファッション「縄文の衣」～喜びを伝える風と時間の祝祭～ ●収蔵作品展「人・物・自然のあいだに」

以上から、いくつかのイベントを紹介します。

●藤森照信 新作茶室 竪穴式茶室「低過庵」 本プロジェクトのアート作品として、茅野市出身の藤森照信氏(建築史家・建築家)による新作・竪穴式茶室「低過庵」を制作・公開しました。「高過庵」(茅野市宮川高部)のある敷地に、地元職人やワークショップ参加者114名と7～8月に制作し、9月17日に完成披露。9～10月に見学会や公開日を設けて、地元だけでなく県内外から延べ646名の皆さんに見学・体験していただきました。「低過庵」



低過庵と高過庵

は「竪穴式」で半地下の室内は窓がなく、ろうそくの灯りが辺りに揺らめき、炉の暖かさをじんわり感じる、とても静かな空間です。スライ

ド式の屋根を窓のように開けると、やわらかな風と外光に包まれ、自然の光の力に驚かされました。

●まちの展 vol.4 茅野駅周辺の店舗や施設で様々なジャンルの作品を展示する「まちの展」との連携事業。諏訪地域、松本、山梨、東京の作家18名が参加。茅野駅西口近くのコミュニティスペース「モチヨリチカバ」を展示の入口となるポータルスペースとし、メイン会場

の茅野市民館(ギャラリー・ビオラハウス含む)に全作家の作品を、駅周辺の9店舗にそれぞれの作品を展示。散歩気分のまちなかアート巡りを楽しんでいただきました。

●こどもたちとみんなの JOMON アートワーク 茅野市内小中学校のこどもたちが、学校で「縄文」に触れ、そこから自分なりに思いをめぐらして作った JOMON アート作品。1,000点以上を集め、茅野市民館の共有スペースに展示しました。こどもたちのアートを大勢の来館者が楽しみました。



●ギャラリー・バードハウス 茅野市民館の中庭の木立から、茅野駅東口前の市役所通りをまっすぐ進むプラタナスの並木を彩るアートの果箱。「縄文の湧き上がる創造力に想いを馳せたアート作品」をコンセプトに出品者を募集しました。美術館やギャラリーを飛び出した野外展として、県内外からの30名の公募作家による作品を飾り、67本の木々がギャラリーに変身しました。



●JOMON フードスケープ「縄文のうつわ展」 縄文をテーマにした「大皿」作品を公募。21点の出品作品より入賞作品を選定し、茅野市美術館常設展示室に展示後、JOMON フードスケープ会場の玉川荒神の古民家で展示。作品を「縄文のうつわ」として「現代的縄文食風景」の食のもてなしに使用しました。

●JOMON フードスケープ「現代的縄文食風景」 自然がはぐくむ力をいただき、分かち合い、命をつなぐく食。太古の縄文から続く営みのあり方を、食べて感じる「現代的縄文食風景」。玉川荒神の古民家を会場に「縄文のうつわ」に盛った「八ヶ岳豊稔プレート」を味わう4日間の【現代的縄文食が味わえる荒神の古民家】と、交流の場として期間中会場を公開する【社交場になる荒神の古民家】を実施しました。

「縄文アートプロジェクト2017」では、大勢の皆さんと様々な表現をつむぎ、つくりあげることができました。

## 金沢御狩野 頭殿沢上遺跡の発掘調査

頭殿沢上遺跡は茅野市金沢御狩野にあります。御狩野公民館の東約350mの地点で、標高980mの台地の南緩斜面を中心に広がっています。付近には中央自動車道の建設に伴って発掘された頭殿沢・御狩野・金山沢北・判ノ木山東・判ノ木山西などの遺跡があり、頭殿沢遺跡から梓田川を越えた南の尾根には諏訪大社の御射山社があります。

頭殿沢上遺跡は縄文時代中期の遺跡として知られていましたが、これまでに発掘調査が行われたことはなく、どのような遺跡なのか実態は明らかではありませんでした。

ところが、今回、遺跡の南斜面を東西に通る市道御狩



野公民館線の改良工事を始めたところ、縄文時代の竪穴住居址や土器などが現れ、緊急に発掘調査を行うこととなりました。発掘調査

は8月25日から始め、途中台風15号の影響もありましたが、9月21日に終了しました。調査中の9月8日には御狩野区の遺跡見学会が行われ、金沢小学校4年生や地元区民の方々など、多くの参加者が関心をもって参加されました。

発掘されたのは縄文時代中期(約5千年の前)の竪穴住居址11軒、平安時代の竪穴住居址1軒、土坑(貯蔵穴や墓穴などの穴)6カ所と多数の縄文土器・石器などです。このうち第11号住居址とした縄文時代中期の竪穴住居址は、南側1/2ほどが道路敷となっていますが、径約4mの円形の住居址です。ローム層に掘り込まれた水平で堅い床の中心に甕のような土器を埋めた炉址があり、壁側に柱穴のある典型的な竪穴住居址です。また、第6号土坑からは、内面に文様のある浅鉢がそのまま潰れた状態で出土しました。

今回の発掘調査により、頭殿沢上遺跡は縄文時代中期でも初期の集落の営まれた遺跡であることが明らかとなり、八ヶ岳山麓に花開いた縄文中期文化の解明や地域の歴史を知る上に貴重な資料を提供することとなりました。

■神長官守矢史料館

## 諏訪上社と江戸幕府・大名

平成29(2017)年4月22日(土)～7月2日(日)まで、当館では、企画展「諏訪上社と江戸幕府・大名」を開催しました。

江戸時代、諏訪神社や諏訪高島藩は、年始の挨拶や将軍の慶弔に関する事、訴訟に関する事などで、江戸城に登城することが多く、諏訪神社関係文書には、多くの江戸幕府との関係を物語る史料が残されています。

「東武公務覚書」(守矢文書)によると、最初は、寛永14(1637)年に、天正10(1582)年に織田信長によって焼き払われてしまった上社の再建願いのため、大祝諏方内匠頼寛と擬祝小出舎人貞辰が、幕府へ陳情に上がろうとしたことが、きっかけだったと記されています。しかし、この時は、大祝が葛木で病気となったため、中止となりました。

その後、正保2(1645)年に、三代将軍徳川家光が厄年であったため、諏訪神社として厄除けの御玉会という御札を幕府へ献上し、その後、年始の挨拶が恒例化した

といえます。これは、江戸時代を通じて、上下社の神職や神宮寺の僧侶が交代で出府するようになりました。

江戸幕府へは、御玉会の他に様々な贈答品が献上されていました。文化元～3(1804～1806)年頃、第七代諏訪高島藩主諏訪忠肅は、「寒瀑蕎麦」を献上しています(小平文書)。当時の名産品を献上することが、将軍へのお土産となっていたようです。

幕府以外へも、老中や若年寄といった幕閣、藩主の親戚、大名に対して、諏訪上社が年始などの挨拶を行った史料が数多く残されています。



(年未詳)6月11日諏訪忠恕書状(小平文書)

茅野市の博物館・文化財だより 八ヶ岳通信 No.36 発行年月日 平成30年3月31日

編集・発行	茅野市八ヶ岳総合博物館	〒391-0213	茅野市豊平 6983 番地	TEL(0266)73-0300
	茅野市尖石縄文考古館	〒391-0213	茅野市豊平 4734-132	TEL(0266)76-2270
	茅野市美術館	〒391-0002	茅野市塚原 1-1-1	TEL(0266)82-8222
	文化財課文化財係	〒391-0213	茅野市豊平 4734-132	TEL(0266)76-2386
	茅野市神長官守矢史料館	〒391-0013	茅野市宮川 389 番地の1	TEL(0266)73-7567